

## 【編集後記】

『部落解放研究』15号をお届けする。グローバリゼーションは、一方で弱肉強食の社会構造を生み、他方で偏狭なナショナリズムを覚醒させた。成果主義は教育にも浸透し、同時に教育の「統制」が進んだ。これらすべて、差別・人権侵害の土壌である。このような人間的状況を解明し、その危険を暴き、超克をめざす。これが、本誌がめざす目標である。

本号は、「部落差別の実態と研究」として3本の論文、「アイデンティティと抵抗」として2本の論文、「宗教と人間」として1本の論文、最後に、調査報告を1本掲載した。山下論文では、戸籍謄本等不正取得事件のおぞましい実態が報告された。あらためて部落差別への憤りを覚える。伊藤論文では、瀬戸内海島嶼部の町の人権・同和問題の意識調査の結果が分析された。そこに、今日の人権侵害・差別意識の構造をみる事ができる。藤田論文では、部落問題研究に向けた科学方法論が検討された。意欲的な研究の次（部落問題研究の展開）が待たれる。文論文では、日本人による在日朝鮮人のアイデンティの収奪が批判され、在日朝鮮人自身のアイデンティの獲得とその基盤（コミュニティ）をめぐる問題が論じられた。打越論文では、「植民地」沖縄の暴走族青年の排除と抵抗の世界が描かれた。文・打越論文とも、ポスト・コロニアリズムの議論と重なる、日本人（またはヤマトンチュー）批判のメッセージとしてある。平田論文では、良寛の生涯と宗教観を辿るかたちで、良寛の人間観・世界観が感動をもって記述された。そして良寛に寄せた筆者自身の思いが記された。最後に淵上報告では、大学の人権学習の履修と学生の受け止めについて報告された。そこに、近年後退する人権問題状況の一端を窺うことができる。

いずれも意欲的な労作である。読者はそれらから、人権・差別問題の実態と分析、さらに問題の根底をなす視点と位置を知ることができる。それらは、議論に豊かなテキストを与えてくれている。本誌は、それらの提起を受け止め、さらに展開するかたちで、次号に繋げていきたいと思う。

本誌14号より合評会を始めた。重厚な議論ができたと思う。本号も合評会を予定している。研究所員の皆さんには日程等が決定したらお知らせしたい。ご参加を呼びかけたい。

(A)